Hiroshima Journal of International Studies Volume 16 2010

「脱アイデンティティ」論再考
―― 現代日本社会分析におけるアイデンティティ概念の有効性 ――

浜 田 雄 介

Reconsidering 'Post-Identity' Theories: Validity of the Concept of Identity in Analyses of Contemporary Japanese Society

Yusuke HAMADA

Since it was originally coined by Erikson (1950), the concept of 'identity' has been used in different contexts and various academic disciplines. However, Ueno (2005) argues that we should rid ourselves of the concept of 'identity' because its modem essentialist assumption is no longer appropriate for a sociological analytic approach. On the other hand, Hall (1996) strongly claims the indispensability of the concept of 'identity' even though he shares such critical viewpoints.

In light of such discussions, the present study explores the potential validity of the concept of 'identity' in order to analyze the contemporary Japanese society. First, I explain why 'identity' should be reconsidered in the contemporary social condition. Second, I reexamine Ueno's understanding of Erikson's theory of 'identity' through his texts. Third, Erikson's original 'ego identity' is compared with Hall's vision of 'identity'. Fourth, I demonstrate how several articles in *Datsu-Identity* (Ueno, 2005) confirm the validity of Hall's and Erikson's concept of 'identity' in various contexts of Japanese society. To conclude, some case studies about how people in Japan aspire to achieve their 'identity' exemplify the validity of the concept of 'identity'.

Ⅰ．本稿の問題意識と論文の概要
Ⅱ．アイデンティティをめぐる現代の社会状況
Ⅲ．エリクソンのアイデンティティ概念とその統合
Ⅳ．「脱アイデンティティ」論から見出される新たなアイデンティティ
Ⅴ．現代日本社会において希求されるアイデンティティ

Ⅰ．本稿の問題意識と論文の概要

エリクソンが臨床上の必要から編み出したアイデンティティ概念は、彼自身が概念に明確な輪郭や属性を与えるのを避けてきたことから、柔軟で脱領域的な用法を可能にし、精神病理学の範疇を超えて社会科学、歴史研究、人文研究などに広く転用されるに至った（栗原，1982b: i）。アイデンティティとはそれが成就されている限りは問われるものではなく、アイデンティティという言葉が多様な領域で人口に膾炙するようになって久しいのは、それがまさに不確かなものとしてわれわれの問題圏に登場してきた

キーワード：アイデンティティ、脱アイデンティティ、統合仮説、自我アイデンティティ（自我同一性）、本質主義的アイデンティティ、リスク社会、「出会う点、縫合の点」、主体、行動建築、人格的統合、創発的内省、自律、つながり、ネットワーキング、受動的＝能動的主体性

からにほかならない（栗原，1996: 13-14）。

しかしながら、そのような現状に抗するかのように、社会学者を中心に国文学や精神医学の著名な研究者らによって2005年に上梓された『脱アイデンティティ』では、アイデンティティ概念そのものの問題性が俎上に載せられている。編者である上野によれば、9本の論文からなるこの著作は、人は生きるうえでアイデンティティを必要とし、確立されている人のほうがより成熟しているといった「アイデンティティ強迫」に憑かれた近代社会および近代社会学理論へのレクイエムを意図して編まれたものとされ（上野，2005: 289）、大いに注目を集めた。

特に上野が問題として焦点化するのが、アイデンティティの統合された状態を構築することが望ましいという規範命題を含みこんだ「統合仮説」である（上野，2005: 7-9）。「統合仮説」に従えば、統合を欠いたアイデンティティは逸脱的ないし病理的とされるほかないが（上野，2005: 32-33）、実際に多くの人々はアイデンティティの統合を欠いても逸脱した存在になることなく社会生活を送っている。また現代の部分帰属化した断片的なアイデンティティのあいだを横断して暮らしていくうえで、複数のアイデンティティ間の隔離と共存はむしろ適合的であるとされる[1]（上野，2005: 35）。このような「統合仮説」の反証としてのアイデンティティの複合性および多元性は、上野にとって「近代的」な背景を持つアイデンティティ概念（上野，2005: 34）の失効を意味し、『脱アイデンティティ』は「アイデンティティ強迫」から現代社会を解放する理論の社会的な闘争の場（上野，2005: 36）を企図するものとして位置づけられていると考えられる。

アイデンティティ概念は、多用されればされるほどそのつどの文脈に応じて多義的となり、誤用や濫用も含めてより難解で論争的なものとなっている。カルチュラルスタディーズの代表的論者であるホールは、アイデンティティ概念をめぐって沸騰した議論を振り返り、そのすべてが、総合的で、起源にあり、統一されたものとしてのアイデンティティ概念に対して批判的だったと述べている[2]。しかしながら、そのうえでホールはアイデンティティ概念を擁護する立場をとる。彼はアイデンティティを行為主体（エージェンシー）と政治の問題の中心に位置するものと考え、主体を捨てたり廃棄したりすることではなく、主体の概念の作り直し、つまり、主体をパラダイムの内側、その新しい、場所を移した、あるいは脱中心化した位置で考察することを促す（Hall, 1996: 訳書8-9）。自己の物語化として成立するアイデンティティは部分的に幻想ではあるが[3]、それでもその言説的、物質的もしくは政治的な有効性は損なわれるものではないとホールはみる（Hall, 1996: 訳書12-13）。

ホールは「よく理解されないかもしれない」と前置きしながら、アイデンティティを以下のように概念づける。

私は「アイデンティティ」という言葉を、出会う点、縫合の点という意味で使っている。つまり、「呼びかけ」ようとする試み、語りかける試み、特定の言説の社会的主体としてのわれわれを場所に招き入れようとする試みをする言説・実践と、主体性を生産し、「語りかけられる」ことのできる主体としてわれわれを構築するプロセスとの出会いの点、〈縫合〉の点という意味である（Hall, 1996: 訳書15）。

ホールに限らず、近代的主体を攻撃してきたフーコーの晩年の著作（Foucault, 1983=2001）や、フェミニズムのアイデンティティ・ポリティクスをその内部から批判してきたバトラー（Butler, 2005=2008）も、アイデンティティ概念を手放そうとはしていない。それはホールが述べるように、様々な困難性を抱えながらも、主体を立ち上げる実践のなかでアイデンティティが不可欠なものだからであり、ホールの議論は本質主義的な見方を退けつつ、固定的で常に同一なのではなく、変化、変転していくものとしての戦略的・位置的なアイデンティティ概念（Hall, 1996: 訳書11-12）の再生を試みようとしている。しかし上野はまさに、戦略的かつ位置的に「脱アイデンティティ」を提唱するのである。

この一見対立しているかのような上野とホール双方の主張は、実のところそれほど隔たってはいないように思われる。上野もまたフーコーやバトラー、さらには上記のホールの著作を引用しながら議論を進めているのだが、上野が「脱」しようとするのは明らかに本質主義的なアイデンティティであり、ここにホールとの一致をみることができる。一方で、上野が述べるようにわれわれは直ちにアイデンティティを「失効」したものとし、「アイデンティティ強迫」から解放されるべきなのだろうか。むしろアイデンティティ概念についてどのようなアイデンテ

ィティが問題とされ、どのようなアイデンティティが必要とされるのかが、丁寧に議論されるべきではないだろうか。

本稿は上野の「脱アイデンティティ」論と、アイデンティティ概念の新たな方途を示そうとするホールの議論について再検討することで、現代日本社会分析におけるアイデンティティ概念の有効性を論考する試みである。ホールが述べる主体を立ち上げる実践としてのアイデンティティは、現代の日本において多くの人々がまさに必要としているものであると考えられる。そしてそのようなアイデンティティとは、アイデンティティ概念を提起したエリクソンが本来意図していたものでもあった。論文の構成として、まず本質主義的なアイデンティティを「脱」しなければならないとされる今日の社会状況について概説し、そこからアイデンティティの統合への欲求が人々のあいだで高まっているということを確認する。次にエリクソンのアイデンティティ論に立ち返り、上野が問題とするアイデンティティの「統合仮説」をエリクソンがどのようなものとして考えていたのかということについて再考する。そしてエリクソンのいうアイデンティティ概念が人格的統合機能としての自我アイデンティティだったということ、またそれがホールのいう「出会う点、縫合の点」としてのアイデンティティと相重なることを明らかにする。「出会う点、縫合の点」としての自我アイデンティティという視点から日本社会の様々な文脈を通じて述べられた『脱アイデンティティ』の各論を整理していくと、結果として多くの論者がエリクソンやホールのいうアイデンティティを支持していることがわかる。最後に、現代日本社会における「出会う点、縫合の点」としての自我アイデンティティを希求する人々の実践を素描したいくつかの研究を挙げ、分析概念としてのアイデンティティの有効性および規範としての「脱アイデンティティ」への危惧を併せて示唆することで、本稿の結論とする。

Ⅱ．アイデンティティをめぐる現代の社会状況

上野が「脱アイデンティティ」を唱え、ホールが新たなアイデンティティ概念の可能性を目指そうとするのは、これまで想定されてきたつねに同一で安定した不変の本質主義的なアイデンティティ（Hall, 1996: 訳書11-12）というものが、それを抑圧的に強制されてきたマイノリティにとってのみならず、多くの人々にとってももはや機能しなくなったということを意味している。それは例えば「国民」や「社員」として「こうあるべき」だという生き方に従うことでは、もはや期待する結果は得られなくなったということである。

リスク社会論を展開するベックによれば、近代化の進展した今日では、これまで人々の「平均的な一生」を支えてきた近代産業社会の生活様式や労働様式、思考様式に依存することはできなくなった（Beck, 1986: 訳書156-157）。リスク社会とは環境問題からテロのような社会的レベルあるいは家庭崩壊や失業といった個人的レベルにまで、さまざまな事柄を選択・決定したときに生じうる不確実な損害としてのリスクの可能性にとりつかれた社会のことを指す（大澤，2008: 128-129）。日本に関しても、戦後の高度経済成長期からバブル経済の崩壊を経た1990年代以降に起こった経済不況や雇用不安、阪神淡路大震災、神戸連続児童殺傷事件や地下鉄サリン事件などの象徴的な出来事によって、既存の秩序が不安定なものとなったという認識が高まってきていることが、リスク社会化として指摘されている（藤村，2008: 233-243）。

自己を統合する安定したアイデンティティの基盤が崩れたことで、人々の行為基準や「自分は何者であるか」ということの基準が不明瞭になったリスク社会において、個人は自分が何をすべきなのか、自分をどこに帰属させるべきなのかがわからないままどのように行為するかの選択を強制され、その帰結に責任を負う主体となる（大澤，2008: 140-142）。日本の就労環境をみても、終身雇用への期待が減少するなかで新たに創り出された派遣労働者は、極端な場合は日ごとに異なる職場で異なる人々との流動的な関係を、そのつどの状況を判断しながら行為を選択し生きていくことを強いられる。加えて「派遣切り」といわれるような突然の解雇が生じうる状況では、既存の労働者アンデンティティは拠るべき行為基準とはならない。個人の行為選択可能性がさらにリスクを増加させ、自らの選択した行為の予測可能性を減少させていくリスク社会の困難性は、いかなる個人の努力によっても避けられるものではない。

ギデンズによれば、このような状況に置かれた個人は逆説的にこれまで以上に統一性のある「自己の物語」（Giddens, 1991: 訳書58-59）を紡いでいかね

ばならないとされる[4]。まとまりを失った自己は、他者にとってはリスクを増大させる不安の源泉であり、それゆえに自己をまとまったものとして他者に伝えることが他者関係において重要となる。さらには、リスク社会における避けられない不確実性と不安を受け入れながら生きていくためにも、断片化した自己を統合しようとすることへの欲求は高まっていくことになる。リスク社会の不確実性や流動性とそれによるアイデンティティ統合への欲求の高まりが、上野やホールの議論、そして現代社会でアイデンティティが問い直されることの背景にあるといえる。

上野とホール両者の議論は、現代社会における新たな統合の可能性について異なる見解を示している。上野が一貫性のある自己を必要のないものとするのは、統合欲求が帰結する先が、もはや機能しなくなった本質主義的なアイデンティティへの回帰しかないとみなしているからだと考えられる。上野のいう現代に適合的な通常の生き方とは、継続性や統一性を有したアイデンティティなどというものはあきらめて、自己を複数に断片化しているものとして受け入れるということ、「明日の自分は今日の自分とは違うのだ」としてそのつどの物事に対処しつつ、選択の結果に伴う自己責任を回避する態度（Bauman, 2000: 訳書166-167）のことである。

翻ってホールが論じようとするのは、現代社会における主体の再生を目指すうえで、本質主義的アイデンティティでも、統合欲求を捨て去るのでもない別のアイデンティティの可能性であり、そのなかでも特に他者の存在の重要性が強調されている。「出会う点、縫合の点」としてのアイデンティティには、他者との関係のなかで働きかけられ、それに応えることで主体が立ち上がるということ、問いかけられることで自己を物語ることができるようになるということが含意されている。

次節でエリクソンの議論に立ち返るのは、ホールが「よく理解されないかも知れない」と述べた「出会う点、縫合の点」としてのアイデンティティの内実が、本来エリクソンがアイデンティティ概念の核となるものとして論じてきたことに通じていると考えられるからである。また後述するように、ホールとエリクソンが論じようとするアイデンティティを希求する実践が現代日本社会において立ち現れてきている。本稿はこれらの点に「脱アイデンティティ」論を再考する必要性を見出している。

Ⅲ．エリクソンのアイデンティティ概念とその統合

上野の「脱アイデンティティ」論は、以下のようなエリクソンの理論の理解に端を発している。上野によると、エリクソンはまずアイデンティティを自我同一性（ego identity）と自己同一性（self identity）とに区別する。さらに自己同一性は個人的同一性（personal identity）と社会的同一性（social identity）とに下位分割され、その相互依存的な二項の関係から自己同一性は成り立っているとされる[5]（上野，2005: 5-6）。上野は自我同一性が自己同一性には還元されない能動性（主体とも呼ばれる）を持つとみなし、さらに「絶対的な能動性」とされる自我について語ることは誰にとっても難しく、結局のところエリクソンが論じるのも「自己アイデンティティ」についてであり「自我アイデンティティ」ではないと断じる（上野，2005: 6）。そして自我アイデンティティを議論から排除したうえで、「わたしとは何者であるかをめぐるわたし自身の観念」である個人的同一性と、「わたしとは何者であるかと社会および他者が考えているわたしについての観念」である社会的同一性との一致がアイデンティティの安定をもたらすという「統合仮説」を本質主義的な「規範」として拒否する（上野，2005: 6-9）。

しかしながら、本来エリクソンが意図した[6]、また専ら重きを置いてきたアイデンティティとは、様々な自己を束ねる自我の統合力を前提とした、能動的で人間の心理的核心となるような自我アイデンティティのほうだった（草津，1978: 113-114）。ともすれば、主体的、能動的自我をあらかじめ捨象した上野の議論は、エリクソンのアイデンティティ論本来の要点を捉え損なっているのではないだろうか。今一度エリクソンの議論に立ち返り、彼が論じようとしたアイデンティティ概念とはいかなるものだったのかということについて確認したい。

人々がアイデンティティを所有していると意識したときにどのように感じられるかを明示するために、エリクソンはジェームズ（James, 1920: 199-200）とフロイト（Freud, 1959: 273-274）によって記された手紙を引照している。ジェームズは「ある精神的もしくは道徳的な態度のなかに置かれたときに、はっきり」と「ものごとに積極的にしかも生き生きと対処できる自分を、きわめて深く、強く感じる」とし、その瞬間に「これこそが真実のわたしだ！」という

内なる声が聞こえてくるのだと綴っている（Erikson, 1968: 訳書9傍点原著）。そして、このような感覚はジェームズによれば以下の要素を含むものである。

能動的な緊張感、いわば自分自身を支えてくれるような感覚、そして外界の諸事物がそれぞれの役割をはたし、そうすることによってわたしの営為を十分調和のとれたものにしてくれることへの信頼感、しかもその際にいかなる担保をつけなくともそうなるだろうという信頼感、というような要素のことです。だから試みにそれを担保付きにしてみるがよい……その態度はわたしにとってただちに生気のない、刺激の乏しいものに凋んでしまうのです。次にその担保を取り除いてみるがよい。するとわたしは（総じて〈überhaupt〉元気いっぱいであると仮定しての話だが）、ある種の深淵なる熱狂的な歓喜を、また、すべてのことを進んで行い、すべてのことを喜んで耐えようという激しい意欲を、感じるのです。……この歓喜や意欲は、言葉では具体的に表現できないようなたんなるムードや感情ではあるけれども、少くともわたしにとっては、明らかに、すべての実践的・理論的決断が下される際の最も深い原理をなしているのです（Erikson, 1968: 訳書9-10 傍点原著）。

ジェームズが「性格」という言葉で表現した上記の事柄は、「生ける斉一性と連続性との主観的感覚」としてのアイデンティティの感覚を最もよく描写しているとエリクソンはいう（Erikson, 1968: 訳書 9 傍点原著）。それは熱心に「探求」するものというよりも、むしろほとんど驚愕のように「襲ってくる」能動的な緊張として経験され、確証を求めているうちに消散してしまうようなことはない（Erikson, 1968: 訳書10）。「ほとんど驚愕のように襲ってくるような、すべてのことを進んで行なおうという意欲」とは、能動的な自我の働きを指してはいないだろうか。そしてそのような能動性は、道徳的、精神的な態度にもとづくことで意欲的な営為は自分の周囲の他者や役割と調和のとれたものとなり、「支えられている」という信頼感がもたらされる。つまりジェームズが聞いた「内なる声」とは、単に彼の内面からのみ沸き上がってきたものではないと考えられる。

そうしたアイデンティティの社会的側面を例証する記述が、ユダヤ人としてのアイデンティティの獲得に関するフロイトの手紙である。

わたしをユダヤ民族に結びつけていたものは（わたしはそれを認めることを恥じるものではありますが）、信仰でもなければ民族的な誇りでもありませんでした。（中略）わたしは、民族的熱狂にひきこまれそうになりますと、いつも、それはわたしたちユダヤ人がともに生活している他民族のなかでもとくに警戒すべき輩によって引き起こされた、有害な誤った熱狂であると考えて、むしろそれを抑制しようと努力したのでありました。けれども、そのほかにも、ユダヤの民の魅力を高めてやまないものが山ほどあります。それは、一つには数多くの何か薄暗い感情の力であります。それは、言葉では表現できないものですから、なおさら力強く感じられるわけです。もう一つは、内的アイデンティティにかんする明確なる意識であります。つまり、ユダヤ人にのみあてはまる共通の精神構造を含んだ心安らかな私事に関する意識のことです。このような一般論は別にしましても、わたしの苦難だらけの人生行路にとっては必要不可欠なものとなっていた以下の二つの特徴は、ひとえにわたしのユダヤ人としての性質に負うものだという自覚が、わたしにはあったのでございます。その二つの特徴とは、第一に、わたしはユダヤ人でありましたために、数多くの偏見から自由であったことであります。第二の特徴とは、わたしはユダヤ人であったため、いつでも野党に組みする用意ができており、「団結固い多数派」と折り合わなくともやってゆける構えができていたことであります（Erikson, 1968: 訳書11-12 傍点原著）。

まずフロイトは「数多くの何か薄暗い感情の力」を強く感じるのだと記している。これはジェームズと同様に、活力的であればあるほど言葉に表すことが難しくなるような、能動的で力強い支えとなるようなアイデンティティの感覚を示唆している（Erikson, 1968: 訳書13）。次に「内的アイデンティティの意識」に関して、フロイトのいう「ユダヤ人にのみあてはまる共通の精神構造を含んだ心安らかな私事に関する意識」とは、単に「精神的」なのではなく、また単に「私的」なのでもなく、それを分有しあっている人々のみが理解できる、概念的ではなく神秘的な言葉によってのみ表現可能な深い共同体感を表している（Erikson, 1968: 訳書12）。

エリクソンによれば、フロイトの「内的アイデンティティの意識」には、長い迫害の歴史と機会制限という否定的性向のなかで達成された、彼の才気あふれる自由な思索にもとづく苦い自尊心が含まれている。引用の冒頭部分からもわかるように、フロイトはただユダヤ人としての民族的意識や熱狂に迎合したのではなく、むしろそれへの傾斜を抑制している。一方で、彼個人の天賦の才能によってなされた思索的達成は、彼が支配的集団から抑圧の対象とされるユダヤ人であるという否定性を克服させ、逆にその肯定的性向を彼に宿す。このような相関のなかで、フロイトは強固なアイデンティティを獲得したという誇りを、「団結固い多数派」のような支配的なアイデンティティからの内的解放として見出している（Erikson, 1968: 訳書13-14）。

ジェームズとフロイト両者の手紙は、上野が問題とした「統合仮説」をエリクソンがどのように考えていたのかということ、そしてホールのいう「出会う点、縫合の点」としてのアイデンティティの内実を理解するための契機となる重要な示唆を含んでいる。アイデンティティとは「役割」や自意識十分な「外観」、単に力んだ「姿勢」にその本質があるのではなく、また静態的で不変なものとして「達成」されるのでもない（Erikson, 1968: 訳書16）。エリクソンが論じようとしたアイデンティティとは、与えられた社会的同一性を無批判に取り込み、自らの個人的同一性とすることではなかった。エリクソンが照射するのは、どのように人々が個人の核心およびかれの共同体文化の核心に「位置づけられ」るのか（Erikson, 1968: 訳書15 傍点原著）、つまり、それら２つの核となるものの困難な交渉のプロセス、またそのプロセスとしてのアイデンティティである。フロイトの例に沿えば、ある歴史的、社会的相対性のもとで彼の思索的な「実践」があり、そのような「実践」が彼をユダヤ人であることの選択的特徴と肯定的に結びつけていること（「縫合」）、そしてこのような「縫合」と「実践」によるアイデンティティの感覚が、彼が「苦難だらけの人生行路」と振り返る「過程」を通じて見出されていることがわかる。

このような「実践」、「縫合」、「過程」という３つの項目は、青年期についてのエリクソンの議論からもみてとることができる。青年期に到来するとされる「アイデンティティ混乱」は、身体の生理的な変化や職業的規範などと、これまでに積み重ねてきた自分自身の斉一性とをどう結びつけるかという問題として立ち現れてくる（Erikson, 1950: 訳書（1）335-336）。深い混乱に対して、青年は誰かに導いてもらいたいという思いから忠誠の対象を探すことや、逆に役割の拒否、さらには逸脱行為に顕著な一貫した反抗などといった（Erikson&Erikson, 1997: 訳書98）様々な試行錯誤の「実践」を行なう。試行錯誤に伴う葛藤の増大は、新たな不安や葛藤を生み出すと同時に新しい機会や集団を探求し、そこに参加しようとするような自我機能の拡大を支持するものとなる。つまりそれはジェームズの手紙にも表されていたような「やってやるぞ」といった試行錯誤の「実践」に不可欠な要素としての自我の積極的な能動性（Erikson, 1968: 訳書224-225）のことを指している。
こうした「実践」によって、人々は他者や社会と「縫合」される。

エリクソンにとって、アイデンティティとは自我が特定の社会的現実の枠組みのなかで定義されている自我へと発達しつつあるという確信の感覚（Erikson, 1959: 訳書10傍点筆者）であり、発達の大半は無意識的なものとして一生続いていく（Erikson, 1959: 訳書149）。エリクソンはアイデンティティ形成を社会的同一性にはたらきかけつつ、個人的同一性を更新していくような、自我の能動性によって継続される動態として明確に意図している。船津によればミード（Mead, 1934=1973）の絶対的な能動性としての「主我（I）」とは「創発的内省（emergent reflexivity）」のことであり、それは他者とのコミュニケーションによって自己を対象化し、自分の内側を振り返ることで何か新たなものが生み出されることを意味している。他者の期待の検討、修正、変更、再構成から、他者の期待に応え返すことで意味が共有され、自分はもとより他者や社会にも変容をもたらしつつ、すべてを同質化するのではない独自性、主体性が生産される（船津，2005: 153-155）。エリクソンが区別する「自我」と「自己」は、それぞれミードの「I（主我）」と「me（客我）」に対応している（上野，2005: 6）。青年の試行錯誤の「実践」による「縫合」とは、他者に働きかけ、また働きかけられるという一連の相互行為のなかで「これだ」と自分で認められるような、間主観的に構築、再構築されていく「最も深い原理」の発見を意味している。

青年にとって重要なのは、そのような試行錯誤の「実践」による「縫合」の「過程」を、自分にとって覆

すことのできないものとして、時には誇りを持ってまで応諾できると感じられるかどうか、「自分はどこに向かって進んでいるかがよくわっている」という意識や自分は重要な人々から認めてもらえるだろうといった確信などのような（Erikson, 1968: 訳書348-349）、心理社会的な安寧感として体験される最善のアイデンティティの感覚（Erikson, 1968: 訳書227）を得ることができるかどうかということである。エリクソンはアイデンティティにとって決定的に重要なこの感覚を「パーソナリティの統一性」と呼んだ（Erikson, 1968: 訳書349）。「パーソナリティの統一性」について、エリクソンは統一されたパーソナリティとは他のものと結びつけられるに足るほど独自のものでなければならないと強調する[7]（Erikson, 1968: 訳書343　傍点筆者）。そうした一見語義矛盾する、エリクソン自身の言葉によると「わけのわからない」統一性とは、個人的同一性と社会的同一性との単なる一致やどちらか一方への傾倒ではない別の統合のあり方を示している。

個人性と社会性との縫合と同時に、エリクソンのアイデンティティ概念では「生ける斉一性と連続性」（Erikson, 1968: 訳書9）としての様々な社会的場面における過去から現在までの自らの行為を「縫合」することも重要である。『脱アイデンティティ』において唯一明確にアイデンティティ概念を支持する斎藤の議論が、このことの理解に手掛かりを与えてくれる。斎藤はアイデンティティの問題を解離現象として捉え、その精神医学的な理解としてパトナム（Putnam, 1997=2001）による「人格」についての説明を挙げている。斎藤によれば、パトナムは「人格」をいくつかの離散した行動状態というモジュール（構成要素）の集合体と考える。乳幼児期にはごく単純なモジュールの組み合わせが、発達とともに次第に複雑化し、それは一種の「行動建築」ともいうべきシステムを形成していく。この自己組織化するシステムの総体が、われわれの「人格」であり、「行動建築」が形成されない状況が解離現象だとされる（斎藤，2005: 143-144）。「行動建築」というこの卓抜な表現について、建築物としての「人格」を構成する様々なモジュールとは、それが自己組織化されない状態においては上野が主張する複数の多元的な自己に対応しているものと考えられる。

時代の変化や自らの心理、生理的な変化にも関わらず自己が一貫しているという状態を通時的同一性、いかなる状況や他者に対しても同様に振舞えるような自己としての統合を共時的同一性として定義するならば、「行動建築」とはそれらのような同一性を要請するものではない。「実践」と「縫合」の「過程」においては、状況や時間に応じて異なる多元的な自己が含みこまれている。多元性、複数性を帯びた構成要素としての自己を「人格」としてまとめあげる「行動建築」とは、未知数の潜在可能力のなかから次々と新たな我を抽き出し、人間を防衛的、受動的存在以上の何ものかにする自我の統合化機能（栗原，1982a: 14-15）の産物ではないだろうか。エリクソンの言葉に準じて、パーソナリティ（人格）が統一された状態を「人格的統合」と定義すると、「人格的統合」を基底とする自我アイデンティティとは実存の本質的基盤としての様々な自己全てを経験したこの「私」、様々な自己全てを意識しうる「私」という、意識的連続性を持った「私」の感覚（Erikson&Erikson, 1997: 訳書122-123）のことを指しているといえる。

エリクソンのアイデンティティ理論における他者や社会に働きかけ、また他者から働きかけられる試行錯誤の「実践」による「縫合」、そして自分にとって最善のアイデンティティの感覚に近づいていく「過程」のなかで「私」をまとめていく「人格的統合」は、全て彼の述べる自我アイデンティティの重要な特徴となっている。つまりアイデンティティが「統合」されるとは、本質主義的アイデンティティにおいて想定されていたような、パラダイムの外側にある個人的同一性と社会的同一性のいずれかに迎合して「誰かになる」ことではない。それは「実践」と「縫合」の「過程」という動態のなかで「私になる」ことであり、まとまりのある「私」を他者に伝えられるようになることなのである。

Ⅳ．「脱アイデンティティ」論から見出される新たなアイデンティティ

アイデンティティ統合への欲求が高まるなかでホールが再生しようとするアイデンティティは、本質主義的視座を超えた先にある「出会う点、縫合の点」において、様々に断片化、多元化した自己のあいだの欠如や分割を越えて、主体が自らの道程を受け入れるためにとらざるをえない位置として論じられる

（Hall, 1996: 訳書16）。そこでの主体とは呼びかけられる試み、語りかける試みと、それに応える過程のなかで間主観的に構築される主体であり、前節の議論から鑑みるに、ホールの議論はエリクソンの自我アイデンティティ論に符合するものとみて差し支えなかろう。

本節では、ホールとエリクソンのいうアイデンティティの視点から、『脱アイデンティティ』の議論を改めて読み解いていく。『脱アイデンティティ』に所収された各論からは、本質主義的なアイデンティティからの脱却と「戦略的・位置的」なアイデンティティの希求を見てとることができる。ここでは鄭、小森、伊野、浅野による各論考を例として取り上げる。

在日韓国人２世である鄭が論じるエスニックマイノリティにおけるアイデンティティの問題とは、要請されるアイデンティティを確立することでも、そこから解放されることでもなく、また複合的アイデンティティと名づけてそこに軟着陸することでもない（鄭，2005: 228）。近代国民国家によって「何者かになれ」と要請されながらも（鄭，2005: 210）、「在日韓国朝鮮人」や「韓国人」のようなナショナルアイデンティティとはあくまで「相対的なもの」に過ぎない（鄭，2005: 204）。むしろ問題は表現することによって生起する、自分をどこにも位置づけることができない「私」(鄭，2005: 237)に関わってくる。支配側の言語である日本語を用いて政治的運動を行なうことに葛藤を覚えながらも、心の奥深くに抑えられていた「伝えたい」という切望の感情をもって、「私」が聞く側とつながり、受け入れられていることが実感できたと鄭は振り返る（鄭，2005: 220-222）。このような「私」とは、前節にみた「実践」と「縫合」の間主観的な実践のなかで受け入れることのできる「私」だといえる[8]。

国文学者の小森もまた、言語や文化を本質主義的に理解することでアイデンティティを見出そうとする主体を、容易に他者を排除する暴力の主体に転換するものとして拒絶し、「脱アイデンティティ」を選び取ることによる人格の連続性を実現していきたいと述べている（小森，2005: 265）。小森のいう「人格」には、環境や外界に対する１人の人間の独得な適応の仕方を規定する心理的、生理的な諸々の系の力動的なシステムという含意がある(小森，2005: 250)。小森は2001年以降に起きた国内の日本語ブームを「病理的な思慕」として例に挙げ、過去への回帰を欲望するのではなく、あえて明確に過去を想起し、それを拠り所として現状にどう立ち向かうかを判断すること、そして明確な態度を選び取り、実践的な行為としてその態度を生きるべきだとする(小森，2005: 249)。このような小森のいう「人格の連続性」とは、「人格的統合」のなされた意識の連続性としての「私」、ジェームズの手紙にみた能動的な「真実の私」と軌を一にしている。

伊野は日本の男性同性愛者の事例をもとに、アイデンティティがマイノリティの政治的実践にとって一定の成果を挙げてきたとしながらも、アイデンティティの政治が境界の外には異質性を、内に対しては同質性を強いるものだったと指摘する（伊野，2005: 43）。伊野のこのような問題提起の背景には、彼が行なったインタビュー調査のなかで、「ゲイ」や「同性愛者」のようなカテゴリーと結びつけるだけでは語りつくせない自己の複雑な様相が確認されたことが挙げられる（伊野，2005: 46）。例えば同性愛者のアイデンティティ獲得や抵抗をめぐる議論のなかで積極的に意味づけられてきた「カミングアウト」について、対象者のなかには自らの性的傾向を公にはしないが否定もしない、あるいは場や状況に応じた態度の使いわけなどの戦略が看取される（伊野，2005: 62-63）。そこにはカテゴリーをもって自己のアイデンティティを語るときに、「どうしても自己を語りつくせない感覚」や「アイデンティティを強要される窮屈さ」（伊野，2005: 66-67）としての統合を前提とした概念的な限界が介在しているとされる。伊野の事例からは、与えられたカテゴリーという本質主義的な差異に固定化されることのない戦略的・位置的なアイデンティティの希求が導出される。

浅野が検討するのは、自分自身について語ることでアイデンティティが構成されるとする物語論の妥当性、特に１つのプロットによって過去から現在が一貫したものとして覆われるという、物語論に共通する認識の現代日本社会分析に対する妥当性である（浅野，2005: 77-79）。浅野は若者の意識調査結果をもとに、人々が状況に応じて複数の顔を持ち、かつどれも嘘や仮面ではないという、自己の多元化した状況を指摘する（浅野，2005: 80-86）。しかし自己の多元化に際して論じられるべきは、自己の物語が「一冊の自伝」に収まらない困難なものであるとすることではなく、様々な自己を物語る新しいマネージメ

ントの産出についてであると浅野はいう（浅野，2005: 93）。浅野の議論は、１つのプロットによって一貫した物語という通時的同一性から脱し、多元的な自己をまとめあげて語ることのできる「人格的統合」への転換に向かっているように考えられる。

このようにみると、『脱アイデンティティ』における各論は、本質主義的なアイデンティティから脱するとともに、それとは異なる主体のあり方、すなわち「人格的統合」に根差したアイデンティティを示唆している。本稿の最後に、次節では現代日本社会において他者に働きかけ、また他者から働きかけられる「出会う点、縫合の点」としての自我アイデンティティが希求されているということを例証するいくつかの議論を提示していく。それによって、現代日本社会を分析する概念としてアイデンティティが有効であることを確認したい。

Ⅴ．現代日本社会において希求されるアイデンティティ

2003年に上梓された『現代日本人の生のゆくえ―つながりと自律―』は、Ⅱ.でリスク社会の到来として挙げた経済不況や未曾有の天災、度重なる凶悪事件、あるいは地縁、血縁といった人間関係の堅固さの弱体化に象徴されるような1990年代以降の日本社会の揺らいだ状況を踏まえて、次世代の日本に生きる人々の生き方、心のあり方を、聞き取り調査によって明らかにすることを目的に編まれている（宮島・島薗，2003: 1-3）。調査結果から編者である宮島と島薗が析出する「自律」と「つながり」への意識の高まりについて、「自律」とは個の自由をかけがえのない価値とし、その自由のあり方に自覚的に規範を設けたうえでその自由を尊び実践するような、現代日本社会において人々のあいだで広まっているとされる意識を指している。また「つながり」とは、「自律」が拠所のない孤独あるいは他者や集団への批判性のない追従に陥らないための他者や社会との結びつきであるとされる（宮島・島薗，2003: 14-17）。今日の社会における「自律」が、既存の固定的な関係やしがらみ「からの自由」として意識される度合いは薄い。人々が評価、熟慮すべき圧力や規範が多様化、複雑化している状況下で目指される「自律」とは、多様な他者との「つながり」のなかで実現されるような「自分らしい」あり方として表象され、「つながり」をもつこと「への自由」という側面を孕んでいるものだとされる。したがって、「つながり」における他者とはお互いの価値観の違いや異質性を前提にしたものであり、人々はそうした他者性に対して十分に意識し、そのうえで自らの人生を支え、意義深いものとするものとして自覚的に責任を負うものとして「つながり」を求めようとしていることを調査結果は示している（宮島・島薗，2003: 21-22）。宮島と島薗の調査は、近代の本質主義的な価値規範から離れたところに立ち上がる「出会う点、縫合の点」としてのアイデンティティが、現代日本社会において広汎に求められている状況にあることを実証しているといえよう[9]。

地域社会学の分野、おもにボランティア論においても、同様のアイデンティティ希求の事象が論じられている。阪神淡路大震災の被災者救援活動を対象とした調査から、似田貝は近代社会の主体論の前提とされてきた再帰的で「強い存在」とは異なる、否応なしに他者からの働きかけを受けつつ、他者に働きかけるという〈受動的＝能動的主体性〉を称揚している（似田貝，2008: xix）。似田貝によれば、主体とは単独では立ち上がることはできず、またそれはただ呼びかけられるだけの存在でもない。それは他者からの／への働きかけによって、そのつどの必要に応じて生成される他者との接触の「具体的、一時的、局所的」な同時性（似田貝，2008: 23）のなかで、自他相互に「生の固有性」を保ちながら立ち上げられていく。またこのような関係は互いの他者性を排除しないため、根源的な同一性を形成しない（似田貝，2008: 22）。似田貝の議論は、近代が要請してきた本質主義的、集団的アイデンティティから脱した先において主体を立ち上げるための、「出会う点、縫合の点」としてのアイデンティティの可能性を見出しているといえる。

エリクソンのアイデンティティ論を支持する栗原もまた、ボランティア活動という空間のなかに、活動の喜びの源泉としてのアイデンティティを見出す。栗原によれば、アイデンティティとは他者とのアクチュアリティ（相互活性化）（栗原，1982b: 288）の所産として、多層的な他者と社会関係が交差し、往き交い、繋留する場や時のなかに浮上してくる（栗原，1982b: iv）。逆にアイデンティティの危機とは個人生活史に意味をもたらすような展望を欠き、他者と生き生きとした関わりを持てないことを指しており、危機に際して人々はそのような関わりを新た

に見出していかねばならなくなる（栗原，1982a: 9）。栗原は個が生かされながら他の人と共働する結び合いを「ネットワークする」という意味で「ネットワーキング」と呼んでいる（栗原，1996: 114）。ネットワーキングに特徴的なのは、自他の生き生きとした活力が触発し合う相乗性である（栗原，1996: 115）。栗原はボランティア活動について、それらの活動を通じて人々は１つに融合するのではなく、それぞれのアイデンティティの違いを保ちつつ自在に結びついたり離れたりしながら、「善意」や「奉仕」ではなく「自発的」に全てを実現していくと述べている（栗原，1996: 120）。ボランティア活動に参加する若者の多くは、活動参加の理由を「面白いから」と答えるという。それはともに身体を動かす他者とともに[10]、自分も他者も元気の出ることに向かうからであり、ボランティア活動は決して一体化できない他者とともに、肩を並べて、それぞれの自己を越境して、よりひろやかな広場＝アイデンティティへと抜けていく行為となる（栗原，199: 121）。それぞれの自己を越境したアイデンティティとは、「出会う点、縫合の点」としての自我アイデンティティのことであり、そのなかで活力的で能動的な主体が立ち現れる。

これらの議論を踏まえて考えると、上野が能動性をもつ自我（主体）を捨象することで「脱アイデンティティ」を唱えたことには改めて違和感を示さざるをえない。主体性を失ったままただ周囲の状況に応じていくことが現代に適合的な生き方だというのなら、それは主体として責任を負い「誰かになれ」という近代が要請してきた規範から、「誰でもなくなれ」という主体性を失わせる規範への退行になるだけではないだろうか。多様な関係性のなかで「縫合」されるアイデンティティによる主体というものが見込まれてもいいはずである。

「出会う点、縫合の点」のような相互にアイデンティティを立ち上げていくことのできる自他関係の機会は、バウマンが述べるように今日の社会においては限られたものなのかもしれない（Bauman, 2004: 訳書110）。しかしそれでもバトラーの以下の記述のように、他者とともにあること、他者に呼びかけまた呼びかけられることで、われわれは「私」を十全に語ることのできる、「出会う点、縫合の点」としての自我アイデンティティへと開かれる。

私たちを形成しているものが（中略）他者によって解体されることは根本的な必然性であり、確実に苦しみである。しかし、それはまたチャンス―呼びかけられ、求められ、私でないものに結ばれるチャンスでもあり、また動かされ、行為するように促され、私自身をどこか別の場所へと送り届け、そうして一種の所有としての自己充足的な「私」を無効にするチャンスでもある。もし私たちがこうした場所から語り、説明しようとするなら、私たちは無責任ではないだろうし、あるいはもしそうであれば、私たちはきっと赦されるだろう（Butler, 2005: 訳書248）。

アイデンティティとは、それは自己の奥底にある内面的なものではなく、実際の他者との具体的な相互行為とその積み重ねのなかで突然もたらされるような、自分の意識だけではどうにもならないものであり、だからこそその獲得には困難が伴う。しかしわれわれは「私」を紡ぐことを日本社会に生きていくなかで強く求め、また際限なく続いていくアイデンティティへの欲望（斎藤，2005: 164）に突き動かされている。そのようななかで、アイデンティティの分析概念としての重要性は、これまで以上に様々な対象や領域にわたって高まり、また精査されていくのではないだろうか。

注

1　上野のいう断片化した社会生活を横断して暮らす人格類型とは、リフトンが提唱するような個人の内面的安定性や無変化性と社会制度との結びつきが流動的となった時代に生きる「プロテウス的人間」という個人像（Lifton, 1969: 訳書47-49）に対応している。プロテウス的人間は自己の諸要素が価値を持っているか否かを判断し、価値がなければそれを容易に変化、修正させながら社会を生きていく（Lifton, 1969: 訳書70）一方で自分の世界に一貫した感情を渇望しながらも（Lifton, 1969: 訳書71）、自分が無価値であるといった意識、あるいは社会に対する不安や憤怒を抱えているとされる（Lifton, 1969: 訳書79-80）。このことは、人々が抱えるアイデンティティの希求とその困難さを指し示している。

2　哲学の領域においてはデカルト以降の西欧の形而上学の中心にある自ら支える主体という考え方への包括的批判が進められ、精神分析の影響を受

けたフェミニズムにおいては、主体性の問題および主体性が形成される無意識のプロセスが探求された。そのほか民族的、人種的、国家的なアイデンティティに対して、カルチュラルスタディーズが反本質主義的な立場から批判をおこなった（Hall, 1996: 訳書7）。

3　岸によれば、自己の物語を語るものとしてのアイデンティティは、不確定な未来に開かれているだけではなく、語りつくせない自己をも含み、断片的に引き裂かれたものとしての不可能性によってしか指し示すことがない。したがってアイデンティティは語られた自己と自己そのものの距離を表す違和感としての自己差異性として、流動化した社会状況を表現する概念となったとされる（岸，2008: 44-45）。しかしホールが主張するのは、そのような語れなさを含みこみながらも、言説のなかに主体をうまく節合もしくは「連鎖化」させた結果としてのアイデンティティである（Hall, 1996: 訳書 15-16）。

4　ただしここで「自己の物語」についてギデンズが仮定しているのは、自己の行為すべてをモニタリングしその責任を負うことのできる再帰的な個人像であり、それは極端に「エリート主義的」であるために、現実的な普遍性は乏しい（樫村，2002: 222-223）。このような樫村の批判は、ギデンズが近代化の進行によって人々の関係の仕方が「純粋な関係性」に近づいていくと述べている点にもとづいている。「純粋な関係性」とは、社会的・経済的生活といった外的条件につなぎとめられていない、お互いのコミュニケーションが双方に利得をもたらすがゆえに持続される、情緒的コミュニケーションにもとづく関係として定義される（Giddens, 1999: 訳書125）。「純粋な関係性」は意味のあるライフスタイルを分かち合うための、関係への自発的なコミットメントによって成り立っており、そこでの自己啓発と他者との関係発展とが結合した過程を通じて、自己アイデンティティ構築がなされるという（Giddens, 1991: 訳書103 - 109）。しかし「純粋な関係性」は誰かを選択することや関係についての責任あるいは評価を、自らの行為を全てモニターし責任を負うことのできる「再帰的な自己」としての個人が引き受けることを前提にしている（樫村，2002: 217）。それに対して樫村は精神分析の見地から、外的につなぎとめられない自発的な関係において「なぜ私を選んだのか」という個のかけがえのなさへの問いは回答不能であるとし、よって実際に人々が関係にコミットするためには、関係の選択に対する明示的な説明がいちいち必要でないような出会いの継続と、それによる固有の記憶を蓄積、共有することが必要になると述べている（樫村，2002: 224-226）。

5　アイデンティティには「同一性」や「存在証明」などの訳語が与えられており、上野は自身の論考のなかで「同一性」と「アイデンティティ」を互換的に用いるとしている（上野，2005: 4）。

6　このことは『心理学辞典』においても明確に記されている（宮下，1999: 4）。

7　社会学においても、アイデンティティは他とつながること（一体化）、自分らしくあること（個性化）という相異なる心の動きを表す、また社会学が生きた現実性を持つために欠かせない概念とされ、個体の様々な欲求がある形に統合された人格と、社会や文化がどのように関わっているかを論じてきた（草津，1995: 85-86）。社会学で論じられるアイデンティティとは、逆説や両義性、曖昧さあるいは揺らぎを含みつつ、弁証法的に形成されるものとして立ち現れてくる（草津，1995: 103）。例えばジンメル（Simmel, 1957: 訳書 269-286）は、大都市生活のなかで与えられる刺激が個人の統合にとって脅威となりつつも、自由と自己形成の機会を提供するような状況のなかでの、アイデンティティの統合とその困難さを論じている（草津，1995: 96）。

8　鄭は別稿においても、アイデンティティを持ちたいと思うこと、あるいはそのように強いる社会の圧力から望ましくない自己をことごとく放逐し、相互承認を取りつけた自己の一面を中心に据えることでアイデンティティを構築すること（鄭，1996: 28）から、内包する様々な自己が居合わせ、ぶつかり、交わるなかで発見される「私」（鄭，1996: 30-32）への転換を提起している。

9　拙稿（浜田，2009）では広島県下のトライアスリート（トライアスロン競技者）を対象とした調査から、彼ら／彼女らの実践を現代日本社会における「自律」とそれを支える「つながり」の事例として論じている。

10　エリクソンにとって、アイデンティティとそ

の確証の過程は、身体、自我、社会の三重帳簿によって初めて記述可能なものとなるとされる（栗原，1996: 16）。例えば歩けるようになった幼児にとって、歩くということは、身体的統御という自己の経験の支配とそれによって得られる社会的信望から、自分が確実な未来に向かって有効な手段を学びつつあるという自尊心をもたらし、幼児の自我の発達に結びつく（Erikson, 1950: 訳書（1）302）。逆にある戦争神経症患者の事例では、指揮官への不信にもとづく集団恐慌、感染症による発熱と疲労、そしてこれらの苦境に耐える内面的理想を支えていた自尊心に背くような命令が下され、自我の均衡を崩壊に至ったこと、つまり身体、自我、社会の3つが互いに支えあったのではなくそれぞれのもつ危険を相互に強調し合ったことが記されている（Erikson, 1950: 訳書（1）47-48）。本稿ではこのような三重帳簿の視点、とりわけそのなかでの身体の意味について議論することができなかった。この点は別稿での課題としたい。

付記

本稿の執筆にあたって、広島市立大学国際学部の湯浅正恵教授には論文の起草から議論の方向性や文章の仔細な表現に至るまで多大なるご指導、ご助言をいただいた。記して深く感謝申し上げたい。

参考文献

浅野智彦，2005,「物語アイデンティティを越えて?」，上野千鶴子編『脱アイデンティティ』，勁草書房，77-101.

Bauman, Z., 2000, *Liquid Modernity,* Polity Press.（森田典正訳，2001，『リキッド・モダニティ―液状化する社会―』，大月書店）

Bauman, Z., 2004, *Identity: Conversations with Bnedetto Vecchi,* Polity Press.（伊藤茂訳，2007，『アイデンティティ』，日本経済評論社）

Butler, J., 2005, *Give an Account of Oneself,* Fordham University Press.（佐藤嘉幸・清水知子訳，2008，『自分自身を説明すること―倫理的暴力の批判―』，月曜社）

Erikson, E. H., 1950, *Childhood and Society,* W. W. Norton & Company.（仁科弥生訳，1977，『幼児期と社会1』，みすず書房）

Erikson, E. H., 1959, *Psychological Issues: Identity & the Life Cycle,* International Universities Press.（小此木啓吾訳，1973，『自我同一性―アイデンティティとライフサイクル―』，誠信書房）

Erikson, E. H., 1968, Identity:Youth and Crisis, W. W. Norton & Company.（岩瀬庸理訳，1969，『主体性（アイデンティティ）―青年と危機―』，北望社）

Erikson, E. H. & Erikson, J. M., 1997, *The Life Cycle Completed: A preview (Expanded Edition),* W. W. Norton & Company.（村瀬孝雄・近藤邦夫訳，2001，『ライフサイクル、その完結〈増補版〉』，みすず書房）

Foucault, M., 1983, "Structuralisme et post-structuralisme", *Telos* vol. 16(55), 195-221.（西永良成ほか訳，2001，「構造主義とポスト構造主義」，『ミシェル・フーコー思考集成 Ⅸ―自己／統治性／快楽―』，筑摩書房，298-334）

Freud, S., 1959, *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud. Translated from the German under the General Editorship of James Strachey. In Collaboration with Anna Freud. Assisted by Alix Strachey and Alan Tyson. Vol. XX(1925-1926): An Autobiographical Study Inhibitions, Symptoms and Anxiety, The Question of Lay Analysis and Other Works,* Hogarth press.

藤村正之，2008，『〈生〉の社会学』，東京大学出版会.

船津衛，2005，『自我の社会学』，放送大学教育振興会.

Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age,* Blackwell.（秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳，2005，『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会―』，ハーベスト社）

Giddens, A., 1999, *Runaway World: How Globalisations is Reshaping Our Lives,* Profile Books.（佐和隆光訳，2001，『暴走する世界―グローバリゼーションは何をどう変えるのか―』，ダイヤモンド社）

Hall, S., 1996, "Who Needs 'Identity'?", in Hall, S. & du Gay, P.(eds.), *Questions of Cultural Identity: Who Needs 'Identity'?,* Sage, 1-17.（宇波彰訳，2001，

「誰がアイデンティティを必要とするのか?」，宇波彰監訳『カルチュラル・アイデンティティの諸問題―誰がアイデンティティを必要とするのか―』，大村書店，5-35）

浜田雄介，2009，「エンデュランススポーツの実践を支え合う「仲間」―トライアスリートの互酬的実践の記述的分析から―」，『スポーツ社会学研究』17(1)，73-84.

伊野真一，2005，「脱アイデンティティの政治」，上野千鶴子編『脱アイデンティティ』，勁草書房，43-76.

James, W., 1920, *The Letters of William James: Edited by his son, Henry James. Vol.* I, Atlantic Monthly Press.

鄭暎惠，1996，「アイデンティティを超えて」，井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座現代社会学15―差別と共生の社会学―』，岩波書店，1-33.

鄭暎惠，2005，「言語化されずに身体化された記憶と、複合的アイデンティティ」，上野千鶴子編『脱アイデンティティ』，勁草書房，199-240.

樫村愛子，2002，「代替生活世界的コミュニケーションの展開―若者たちに見るポストモダン的共同性―」，田邉信太郎・島薗進編，『つながりの中の癒し―セラピー文化の展開―』，専修大学出版局，211-249.

岸政彦，2008,「アイデンティティとネットワーク―ある沖縄人女性の生活史と文化実践から―」，『人権問題研究』30，41-58.

小森陽一，2005，「母語幻想と言語アイデンティティ」，上野千鶴子編『脱アイデンティティ』，勁草書房，241-265.

栗原彬，1982a，『管理社会と民衆理性―近代日本の心理＝歴史研究―』，新曜社.

栗原彬，1982b，『歴史とアイデンティティ―日常意識の政治社会学―』，新曜社.

栗原彬，1996，『〈やさしさ〉の闘い―社会と自己をめぐる思索の旅路で―』，新曜社.

草津攻，1978，「アイデンティティの社会学」，『思想』653 108-142.

草津攻，1995，「アイデンティティの社会学」，井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座現代社会学2―自我・主体・アイデンティティ―』，岩波書店，85-106.

Lifton, R. J, 1967, *Boundaries: Psychological Man in Revolution*, Vintage Books.（外林代作訳，1971，『誰が生き残るか―プロテウス的人間―』，誠信書房）

Mead, G. H., 1934, *Mind, Self, and Society: from the Standpoint of a Social Behaviorist*, The University of Chicago Press（稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳，1973，『精神・自我・社会』，青木書店）

宮島喬・島薗進，2003，「はじめに」，宮島喬・島薗進編『現代日本人の生のゆくえ―つながりと自律―』，藤原書店，1-5.

宮島喬・島薗進，2003，「現代日本人の自律とつながり」，宮島喬・島薗進編『現代日本人の生のゆくえ―つながりと自律―』，藤原書店，13-57.

宮下一博，1999，「アイデンティティ」，中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司編『心理学辞典』，有斐閣，4.

似田貝香門，2008，「序（はじめに）」，似田貝香門編『自立支援の実践知―阪神・淡路大震災と共同・市民社会―』，東信堂，i-xxvii.

似田貝香門，2008，「市民の複数性―現代の〈生〉をめぐる〈主体性〉と〈公共性〉」，似田貝香門編『自立支援の実践知―阪神・淡路大震災と共同・市民社会―』，東信堂，3-29.

大澤真幸，2008，『不可能性の時代』，岩波書店.

Putnam, W. F., 1997, *Dissociation in Children and Adolescents: A Developmental Perspective*, The Guilford Press.（中井久夫訳，2001，『解離―若年期における病理と治療―』，みすず書房）

斎藤環，2005，「解離の時代にアイデンティティを擁護するために」，上野千鶴子編『脱アイデンティティ』，勁草書房，137-166.

Simmel, G., 1957, *Brücke und Tür: Essays des Philosophen zur Geschichte, Religion, Kurst und Gesellschaft*, im Verein mit Margarete Susmann herausgegeben von Michael Landmann.（酒田健一・熊沢義宣・杉野正・居安正訳，1976，『ジンメル著作集12―橋と扉―』，白水社）

上野千鶴子，2005，「脱アイデンティティの理論」，上野千鶴子編『脱アイデンティティ』，勁草書房，1-41.

上野千鶴子，2005，「脱アイデンティティの戦略」，上野千鶴子編『脱アイデンティティ』，勁草書房，289-321.

（掲載許可2010年７月14日）